ま　え　が　き

鳥取県衛生研究所報第34号をお届けします。本所報は、石田前所長の指導のもとで平成５年度に実施された業務の概要をまとめたものであります。ご高覧のうえ、ご批判、ご叱正を賜れば幸いであります。

昨年の冷夏、長雨から一転して今年は干天、酷暑の年でありました。ここ数年間、世界各地で異常な乾燥や、異常な豪雨が頻発しております。これらは地球を取り巻く大気の異常、すなはち大気汚染がその一因であると警鐘をならす研究者も数多くあります。

幸いにも、鳥取県においては、中海や湖山池のような閉鎖性水域の汚濁がみられるものの、その他の公共水域や大気等については、未だ山紫水明の良好な環境を保持していると言えましょう。

しかしながら、これらは将来にわたって永遠に保証されたものではありません。すべての生活者や企業が汚染を防ぐよう努めるとともに、常に環境を注視し、監視してゆくことが必要であり、地域の第一線機関である保健所とともに衛生研究所の果たしてゆく責任は重大であります。

一方、公衆衛生面でみると、交通機関の発達にともなって人の動きや、物の動きが非常に活発になってきており、世界中の文化に接したり、いろいろな食物を食べたりする機会が多くなり人々の生活を豊かにしてきました。しかし、そのためにエイズ等の感染症も昔のように水際で防ぐことが困難になってきました。特に、今年はインドで発生した肺ペストでは厚生省をはじめ関係各機関が万全の防疫体制をとったことは記憶に新しいところであります。当所においても、感染症サーベイランス情報事業等感染症の流行を事前に予測し、大流行を未然に防止するため医療機関とも十分に情報の交換を行いながら、地域保健の向上のために各種の調査研究や試験検査を実施しました。

なお、鳥取県では衛生研究所の施設が老朽化し、また敷地面積が非常に狭くかつ住宅地に位置するために、移転改築を計画し、今年からその将来構想について検討を始めました。関係各方面のご意見を参考にしながら数年後には地域における保健及び環境の科学的・技術的中核機関としての任務を果たせる施設をつくってゆきたいと考えております。

このような変化の激しい時期の対応できるよう、関係各機関と密接な連携をとりながら職員一同一層努力をしてまいりたいと存じます。

関係各位のご支援、ご指導をよろしくお願い申し上げます。

平成６年12月

鳥取県衛生研究所長　長谷川　嘉　一